令和八年度一般選抜（前期日程）　国語（経済学部経済工学科）　標準解答例

［国語・現代文］野口雅弘『中立とは何か　マックス・ウェーバー「価値自由」から考える現代日本』から出題。文章の指し示す内容、筆者が言及する「価値自由」について、適切に理解、表現する力を問う。

一　（60点）

問1	どの政党のどの政策を　～　に抜き取られている。
問2	（ウ）
問3	政治的に中立であろうとして対立や党派性を回避することは、社会において影響力を持っている勢力の言動を黙認することにつながり、中立的な態度が政治的に濫用されることで、結果的には政治的な態度をとっていると見なせるため。
問4	ウェーバーの価値自由は、主体の価値判断を対象へ直接導入することを禁じる点において倫理的な中立を求めているようにも見えるが、それはさまざまな価値の対立に対していずれからも距離を置くという意味での中立ではなく、自分が何らかの価値に関与している党派性を自覚しながら対立を認めつつ、さまざまな対立する価値を比較検討する中で、自分の価値を明確にする考えである。
問5	たとえ親密な間柄であっても意見の相違点を認識し、正面から向き合って対立の要因を検討し判断するという辛い経験を習慣的に実践して積み重ねてゆくことで、決めることが難しい時代に自分の意見を持てるようになり、討論する政治文化が育つため。
問6	「党派性」とは、価値の対立によって個人や集団間で主義・主張が異なり、特定の派閥を形成することを指す。地球温暖化問題を例に挙げると、自らの将来や未来の子孫のために温室効果ガスの削減に積極的に取り組むべきだと主張する団体や企業、国家があるのに対し、対策に要する設備のコストや事業縮減に伴う経済活動の停滞を理由に、消極的な姿勢をとる企業や国家もある。現代の政治教育においては、中立性を理由にこのような党派性の対立までは十分に扱えていないと言える。

令和八年度一般選抜（前期日程）　国語（経済学部経済工学科）　標準解答例

［国語・現代文］星野太『美学のプラクティス』から出題。文章の指し示す内容、および「美学」という学問に潜在する「矛盾」とその可能性について、筆者の言及に即して適切に理解、表現する力を問う。

二（60点）

問1	美学は、抽象的思弁としての観念的な美と具体的事象としての美のどちらかだけを思索するのではなく、常にその両方を往復しながら思索をすることが通常であるということ。
問2	美学は学問の一分野であるが、学問は客観的な証明根拠を必要とするため、客観的な証明根拠がない「美しいもの」を対象とする「美しいものについての学問」にはなりえず、また、例えば洒落た言葉遣いに終始するだけのような「美しい学問」にもなりえない、という矛盾を抱えていること。
問3	美は、人や時代、文化等によって異なり、普遍的に妥当する原因をもたない、説明しがたいものであるため、それを捉えようとする美学は、時代や地域を問わず不信感や疑念を抱かれやすいということ。
問4	説明しがたい美を学問的に説明しようとする美学は無益な営みであるという固定観念に対し、美学が全く異なるレベルの問題を並立させている点を重視し、その「不純」さや「混乱状態」を逆手に取り、とりわけ「感性」に注目して政治との関連でとらえ直そうとするアプローチ。
問5	「理念的な美」と「現実的な作品」にまたがる美学の混乱状態の批判は、そもそも美学に「美」「芸術」「感性」という異なるレベルの対象領域が並列しており、美学が「理念的な美」と「現実的な作品」にまたがる「不純なもの」であるという構造に由来するものであるため、避けることができないということ。
問6	美学を、「美」と「作品」と「感性」をめぐり、異なるレベルの議論が錯綜する領域だと認めるなら、政治一般にも不可欠なものとしての感性的な認識の再評価、さらに理性ではなく情動に訴えかける昨今のメディア・テクノロジーの批判的考察さえも導く「体制」にもなりうること。